

唐代の契丹と突厥第二可汗国

菅 沼 愛 語

はじめに

初の征服王朝である遼を建国した契丹が、北東アジア・東アジアの国際情勢に与えた影響は軽視できない。それは唐末以降に顕著なものとなるが、それより二世紀も早い七世紀頃に既に顕在化しつつあり、東アジアの情勢に深く関わっていた。契丹は、地理的に中華文明圏と遊牧地帯との中間に位置することから、双方の勢力にとっては戦略的にも重要な地域であった。

七世紀初頭の契丹は、第一可汗国時代の突厥に従属していたが、太宗は突厥討滅のための下準備として貞観二年（六二八）に契丹を唐に寝返らせ、東の守りを突き崩した後、貞観四年（六三〇）に突厥を滅ぼした（注一）。また、玄宗は契丹・奚の酋長達を郡王に封じ、彼らに対して七人もの公主を降嫁させて懐柔につとめたが、その理由は突厥への牽制にあったと思われる（注二）。

七世紀終わりから八世紀前半にかけて、契丹は唐と突厥第二可汗国の狭間にあって、時には唐に帰順し尖兵となって突厥を攻め、時には突厥に従属して唐に脅威を与えた。突厥史、とりわけ第二可汗国において、契丹の帰属をめぐる唐

との対立は軍事上・外交上の重要問題であった。本稿では、その時期の契丹と突厥第二可汗国との関係を中心に、その展開を見ていくことにする。

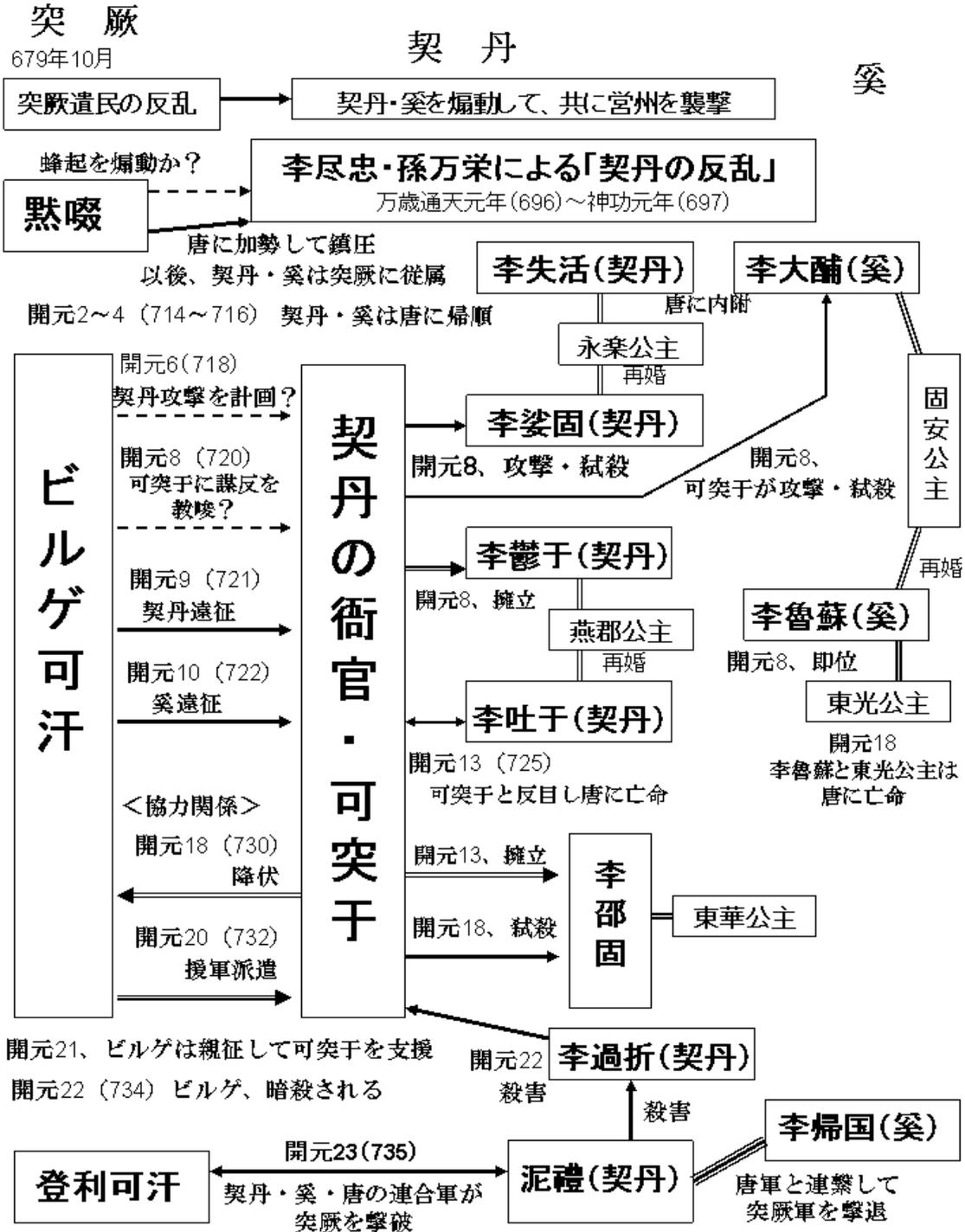
また、本稿では、突厥のビルゲ可汗、契丹の可突于（または可突干）などのような個人の行動を中心にすえて当時の国際情勢を見ていく。その理由の一つは、システムが既に確立していた中華世界とは異なり、遊牧国家である突厥や国家建設期の契丹においては、システム作りの途上であるために相対的に個人の寄与が大きかったからである。個人史を通じて世界史を見るという方法でこのテーマを掘り下げたいと思う。

具体的には、突厥第二可汗国と契丹が特に深い関係を持った四つの事件として、①契丹の反乱と突厥（六九六～六九七年）、②突厥包圍作戦と可突于の乱（開元八年）、③可突于の再度の乱と突厥ビルゲ可汗の暗殺（開元一八年～二二年）、④登利可汗の契丹遠征（開元二三年）を取り上げる。

尚、本稿の歴史的背景としては、以下のような先行研究がある。唐代の契丹史としては、松井等氏、田村実造氏、愛宕松男氏らが、その全体像について論考しており、先駆的な基礎を与えている。また、唐代の契丹と周辺民族との関わりについては、突厥あるいは渤海の視点から、日野開三郎氏、古畑徹氏らが考察している（注三）。

また、契丹人の名前は史料によって異なるので、本稿では『旧唐書』卷一九九・契丹伝の表記で統一する（注四）。契丹・奚の動向や人物関係の複雑さを明瞭化するために相関図を附した（注五）ので、参照しながら読み進んで頂きたい。

< 相関図：突厥と契丹・奚 >



第一章 李尽忠・孫万栄による契丹の反乱と突厥（六九六年～六九七年）

本章では、六九六年に勃発した契丹の反乱と突厥の関わりを見る。

突厥は太宗によって滅ぼされた後、約五〇年間、唐の羈縻支配下に屈伏したが、調露元年（六七九）一〇月、独立を求めて叛旗を翻し、かつて属国であった契丹・奚も煽動して営州を襲撃した（注六）。しかし、突厥・契丹・奚連合軍は唐の反撃にあつて敗退し、突厥遺民による北東アジアへの反乱の拡充という試みは失敗に終わった。

その後、突厥遺民は二度の失敗を経て、永淳元年（六八二）、第二可汗国を樹立した。一方の契丹は、その後も唐の羈縻支配下に服していたが、万歳通天元年（六九六）五月、営州都督・趙文翽の苛政に反発した李尽忠（松漠都督）と孫万栄（帰誠州刺史）（注七）が蜂起し、営州を襲撃・占領して趙文翽を殺害した。同年五月、唐は契丹討伐軍を営州に派遣したが、八月には契丹軍によって撃破された。契丹の反乱が勃発する二カ月前（六九六年三月）、青海で行なわれた素羅汗山の戦いにおいても吐蕃軍に大敗（注八）していた唐は、東西両戦線で惨敗し、苦境に陥った。この時、唐に対して契丹討伐を申し出たのが突厥であった。

唐は、再興当初より突厥第二可汗国を認めず、幾度か討伐軍を派遣してきたが、可汗の黙啜が、この前年の天冊万歳元年（六九五）一〇月に降伏したので、則天武后は黙啜を帰国公に封じていた（注九）。

東西に難敵を抱えて苦闘中だった武后は突厥の申し出を喜び、万歳通天元年（六九六）九月、契丹征伐を命令した。突厥軍は、翌月（六九六年一〇月）に李尽忠が病死すると、この隙に乗じて松漠地方の契丹部落を襲撃し、李尽忠と孫万栄の妻子を捕虜にする等、早々に戦果を挙げた。しかし、この後、敗残の契丹軍は孫万栄の指揮下で再び勢いを盛り返し、冀州・瀛州（ともに河北省）を襲撃して河北を震撼させたので、唐は再び大討伐軍を派遣するが契丹軍に敗北し

た。この折も突厥が唐を援護し、孫万栄の本拠新城（万栄自身は幽州を包囲中で不在だった）を襲撃したので、根拠地を奪われた契丹軍は動揺して敗北し、敗残の孫万栄も下僕に暗殺されて、神功元年（六九七）六月、契丹の反乱は鎮定された（注一〇）。この後、弱体化した契丹・奚は突厥に隷従する事になった。

契丹の反乱を鎮圧する過程で、突厥は以下のような利益を得た。①反乱軍を撃破した褒美として默啜が則天武后から遷善可汗に冊立され、復興突厥は唐より正式に承認された。②反乱鎮圧の報酬として突厥は唐から絹・鉄など望みの品々も獲得した。③突厥軍は契丹の反乱の隙に唐の北辺にも入寇した。④突厥は契丹と奚を属国となした。⑤この戦いで名を挙げた突厥は征西に乗り出し西方へも勢力圏を拡充した（注一一）。

この様に突厥が利益を享受した事、六七九年の突厥遺民の反乱の時にも突厥が契丹を煽動したこと等から推察して、六九六年の契丹の反乱も突厥が煽動したのではないかと考える先行研究もある（注一二）。

第二章 突厥包囲作戦と可突干の乱（開元八年）

（一） 突厥包囲作戦

突厥は契丹鎮定戦を通じて基盤を強固にし、以後、唐を圧迫するようになった。突厥の従属国となった契丹・奚は、先天元年（七一二）には捕縛した幽州都督孫佺を可汗の默啜に献上する等、突厥の尖兵と化して唐に対して脅威を与えていた（注一三）。しかし、默啜が老衰で残虐性を増し始めた開元二年（七一四）頃から、默啜が横死し、甥のビルゲ（毗伽）が軍事クーデターで即位する開元四年（七一六）までの間に、カルルク・キルギス・ウイグル等の諸族が突厥を見限って相次いで唐に内附する（注一四）なか、契丹の首領李失活（注一五）と奚の首領の李大酺も唐に帰順した（注

一六)。玄宗は契丹・奚を懐柔するため、李失活と李大酺の各々に郡王号と都督号を授与して公主を降嫁させ(注一七)、營州都督府を復置する(注一八)等して東北辺の防衛を強化した。

突厥の混乱と弱体化を見て攻撃の好機と判断した玄宗は、開元六年(七一八)二月、寝返った諸族も動員して北伐を計画した(注一九)。朔方大総管・王峻の統率下に組織された蕃漢の混成軍三〇万からなる突厥討伐軍には、李失活と李大酺も動員された。突厥討伐令の発布後の開元六年五月、李失活が死去したが、李失活の従父弟・李娑固が即位した(注二〇)ので、契丹軍の参戦が中止になる事はなく、翌年の開元七年には北伐の最終計画案が決定し、開元八年の秋を期して、唐軍は東の契丹・奚、西のバスマイル(拔悉密)を先鋒となして東西から突厥を包囲攻撃することになった(注二一)。

唐による大規模な包囲作戦を知ったビルゲ可汗は驚愕したが、老臣トンユクク(噉欲谷)の洞察通り、開元八年九月、短慮なバスマイルだけが先走って突厥を襲撃した。王峻率いる唐軍も契丹・奚も出兵しなかったため、バスマイルは恐れて撤退したが、突厥はこれを追撃して打撃を与え、勝ちに乗じて涼州と甘州も襲撃し、契苾も掠奪して、唐の機先を制したのであった(注二二)。

(二) 可突于の乱

バスマイルが突厥に撃破され、契丹・奚も出撃しなかったため、玄宗の計画した突厥包囲作戦は失敗した。同じ開元八年に、契丹で衙官の可突于が謀反を起こしたため、混乱状態にあった契丹と奚は突厥討伐に出撃できなかったと思われる(注二三)。

本節では可突于の謀反を概観したいと思うが、まず可突于という人物について諸史料の記述を以下にまとめ、人物像を見ておきたい。

・契丹人からの人望が篤かった。（『驍勇にして衆心を得る』〔旧唐書』契丹伝〕「衆情の望むところ」〔冊府元龜』卷九九二・外臣部・備禦五〕）

・玄宗もその名を知るほど有能な政治家であった。（開元六年に李失活が死去した際、玄宗は可突于に勅書を下して契丹の統治を委任している）

・軍才に秀でた驍将であった。（李過折と兵馬を分掌『旧唐書』契丹伝）、静折軍副使であった（『新唐書』卷二一九・契丹伝）、開元一〇年、玄宗より左羽林將軍に任命された（『旧唐書』契丹伝）、唐軍を二度も撃破している）
・外交的手腕に長じていた。（開元二一年、突厥と渤海から援軍を得て唐と対戦するので、突厥可汗や渤海王と連合できるだけの外交力も有していたと思われる）

・野心的な梟雄であった。（二度も主君を弑殺し、人面獸心『旧唐書』契丹伝）とも評される）

契丹王達が恐れて排斥を試みているところからも、可突于の衆望と能力が王達を凌いでいた事が推し測れる。李失活が死去した直後の開元六年六月、玄宗は可突于に勅書を下している。『冊府元龜』卷九九二・外臣部・備禦五には、可突于への命令として、

近ごろ押蕃使薛泰の表に曰く「突厥の殺兒（＝ビルゲ可汗（注二四））、大雉に至り、万衆と揚言して両蕃（＝契丹・奚（注二五））を掠さんと欲す」と。卿の智勇をもって彼の狂愚を制し（中略）宋慶札らとともに籌度し、事理を失うなかれ。

との玄宗の言葉が記されている。この勅書から、玄宗が可突于を信頼し、営州都督の宋慶札（注二六）と連繋して突厥に備えるよう下命した事、突厥のビルゲ可汗が、李失活の死に乗じて契丹・奚への侵攻を企てたらしい事の二点が読み取れる。

可突干は、この様に玄宗から篤く新任されていたが、新しい契丹王の李娑固が彼を警戒して除こうとしたため、開元八年、謀反を起こした。李娑固が奚王李大酺とともに営州に逃走し、営州都督の許欽澹に救援を要請したので、安東都護の薛泰が出撃し、李娑固・李大酺と連合して可突干と戦うが、唐軍は大敗し、薛泰は捕虜となり、李娑固と李大酺は可突干に殺された。しかし、可突干がこの後、李娑固の従兄弟・李鬱干を擁立して玄宗に許しを乞うたので、玄宗は可突干の罪を許し、李鬱干を契丹王として承認した。玄宗はまた、亡くなった李大酺の弟李魯蘇を新しい奚王となし、李鬱干と李魯蘇に各々公主を降嫁させて契丹・奚に対する間接的支配を再開した（注二七）。

(三) ビルゲ可汗の契丹遠征と奚遠征（開元九年～開元一〇年）

唐側の包囲攻撃を凌いだビルゲ可汗は、翌年の開元九年（七二二）、唐に遣使し、玄宗の子になりたいと申し出た（注二八）。おそらく、ビルゲは唐側の再攻勢を危惧して和睦を懇願したのであろう。

その一方で、ビルゲは契丹と奚に侵攻し、開元九年の冬に契丹、開元一〇年（七二二）の春に奚を各々攻撃した。突厥軍の契丹・奚への遠征は突厥碑文にしか記載がないが、ビルゲ可汗碑文（南面二行目～四行目）によれば、突厥軍は、契丹・奚の人畜を多数奪って大勝利を収めたということである（注二九）。ビルゲの遠征動機は二つ考えられる。一つ目の動機は、契丹・奚が突厥を裏切った事に対する復讐戦であり、二つ目の動機は防衛戦で、契丹・奚が今後も唐の尖兵となって突厥を脅かす事がないよう、打撃を与えるのが目的だったと思われる。

(四) 可突干を煽動したもの

開元八年、可突干の乱が勃発したために契丹・奚は突厥包囲戦に出撃できなかった。突厥にしてみれば可突干の乱が幸いして命拾いできたのである。状況から考えると、筆者は、可突干は突厥の教唆によって謀反を起こしたのではないかと思う。

契丹・奚は、約四年前まで突厥の勢力下にあったから、親突厥派、反唐派も当然いたはずであろう。契丹・奚の国内には突厥の謀略に応じる勢力が存在したと思われる。例えば『通典』巻二〇〇・边防一六・庫莫奚には、

開元八年、李大酺、戮死す。弟の李魯蘇を立てて王と為し、詔して固安公主を妻と為す。時に魯蘇の牙官塞默羯、謀りて魯蘇を害して突厥に翻帰せんとす。公主ひそかにこれを知り、ついに宴を設けて塞默羯を誘い捕えて殺す。

と見え（注三〇）、牙官の塞默羯が、奚王の暗殺と突厥への出奔を画策している。突厥が、塞默羯に奚王の暗殺を唆していたとも考えられる。突厥はまた、開元二三年、契丹遠征を行なうが、出撃前に奚に内通者を作り、内側から奚の切り崩しを謀っている（注三一）。六七九年一〇月に唐に叛旗を翻した突厥遺民も契丹・奚を煽動して營州を襲撃するように、突厥が契丹・奚を煽動する事例は過去にも見られるので、開元八年にもビルゲ可汗が契丹に対して謀略をしかけた可能性もあろう。

翻って可突于であるが、親唐派の契丹王を弑殺し、唐軍とも交戦しているので、反唐であることは明白である。可突于一〇年後にも謀反を起こし、この時には明らかに突厥に降伏し、突厥軍と連合して唐軍と戦っているため、あるいは開元八年の時点でビルゲ可汗と可突于の間で交渉が始まっていた可能性も考えられる。

以上より、筆者は、ビルゲが反唐の可突于を煽動して契丹に内紛を起こし、契丹・奚が突厥包囲作戦に出撃できないよう策謀したと考える。更に言えば、四面楚歌の状況にあった突厥にとって東西両戦線に軍勢を派遣することは危険だったため、ビルゲは西のバスマイルに対しては軍事力を投入し、東の契丹・奚に対しては謀略をしかけたのではないかと推測する。

第三章 可突于の再度の乱と突厥ビルゲ可汗の暗殺（開元一八年～開元二二年）

玄宗は開元九年、ビルゲ可汗の請願に応じ、可汗と父子関係を結んだが、突厥に対する警戒を緩める事はなく、同年には朔方節度使を創設し、開元一四年には幽州節度使に五軍鎮を増設する等して北辺の防備を強化した(注三二)。これに対し、ビルゲは開元一五年(七二七)、吐蕃の密書(瓜州挾撃を提案)を献上する事で玄宗に忠誠心を示した(注三三)。当時、唐と吐蕃は河西・隴右で攻防戦を繰り返しており、玄宗も吐蕃と突厥の連繫を危惧していたので、吐蕃と決別したビルゲを嘉して互市を許可し、毎年絹数十万を下賜した。ビルゲは以後、中国には入寇せず、開元二〇年には玄宗の協力を得てキョル・テギン(闕特勤)碑文も完成させて(注三四)、唐とは和平を保った。しかし、表面上、唐と和睦したビルゲは開元一八年以降、契丹の可突于を支援し、北東アジアを戦場として唐と対戦した。本章では、可突于の再度の乱を取り上げ、唐と良好な共存関係を構築していたビルゲが、なぜ契丹情勢に深入りして唐と対決したかについても考えたいと思う。

(一) 可突于の再度の乱とビルゲ可汗の契丹支援

開元八年の可突于の乱が終息した後の契丹は、毎年の様に朝貢を欠かさず(注三五)、可突于も開元一〇年、玄宗より左羽林將軍を授けられて并州(山西省)への行幸にも扈從する(注三六)など、唐とは良好な親善関係を維持していた。しかし開元一三年(七二五)、可突于と時の契丹王・李吐于(注三七)が対立し、李吐于は妻の燕郡公主を連れて唐に亡命した。この後、可突于は李邵固(注三八)を擁立し、玄宗もこれを承認して李邵固に東華公主を降嫁させるが、可突于はこの新しい契丹王ともやがて馬が合わなくなる。そして開元一八年、可突于は使者として唐に赴いた時、唐からも冷遇されたので遂に不満を爆発させ、李邵固を弑殺して屈烈を擁立し、奚を脅して突厥に降伏した(注三九)。

可突于の援軍要請に応じてビルゲ可汗は開元二〇年(七三二)と二一年(七三三)に派兵して唐軍と対戦するが、突

突厥軍と唐軍の交戦が『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』『冊府元龜』に記されていないため、開元一八年以降の唐・突厥の対戦に関して、これまであまり取り上げられる事がなかった。しかし、契丹軍を撃破した将軍が出した戦勝報告書「為幽州長史薛楚玉破契丹露布」（以下、「破契丹露布」と略す）が、『文苑英華』卷六四七と『全唐文』卷三五二に載っており、突厥軍の動向が窺える。岑仲勉氏は「破契丹露布」の発布時期等を考証し、古畑徹氏は、これを利用して唐と渤海の戦争を論じている（注四〇）。ただ、岑氏は史料の考証にとどまり、古畑氏の論考の軸は渤海と唐の対立・抗争であった。本節では「破契丹露布」も史料として、突厥・契丹連合と唐の戦いを見てゆく事にする。

開元一八年に謀反した可突于に対して、玄宗は開元二〇年正月、吐蕃との戦いで戦果のあった朔方節度使の信安王禕を召還して、契丹鎮圧戦に投入した（注四一）。信安王禕は同年三月、契丹・奚・突厥連合軍を幽州の北山において大破した（注四二）ので、可突于は北に遁走し、奚軍は唐軍に降伏した。「破契丹露布」によれば、この合戦にはビルゲが派遣した突厥の援軍が参戦し、唐軍に敗北したと記されている（注四三）が、ビルゲ可汗碑文には記載がない。突厥軍が敗北したので、ビルゲが故意に記さなかったと考えてよからう。

翌年の開元二十一年、ビルゲは自ら援軍を統率して可突于の加勢に駆けつけた。おそらく、北に逃走した可突于が突厥に再度の援軍要請をしたので、唐への雪辱戦を期したビルゲは自ら出撃したと思われる。可突于が、この当時反唐であった渤海に対しても共闘を持ちかけたので、渤海軍も可突于に助勢し（注四四）、突厥・契丹・渤海連合軍は、開元二十一年閏三月、都山において唐軍を撃破した（注四五）。この会戦で、唐側は総大将の郭英傑と呉克勤が戦死し、六千餘人（『旧唐書』契丹伝）とも万人（『新唐書』契丹伝）とも言われる将兵が戦死したが、勝利した突厥陣営でもビルゲの息子が戦死（注四六）しており、戦いは熾烈であった。

（二）ビルゲ可汗と可突于の暗殺（開元二十二年）

都山の戦いで突厥・契丹・渤海連合軍に敗北した玄宗は、突厥と契丹に対して個別に対応した（注四七）。即ち、突厥に対しては懐柔策を取ってビルゲ可汗に公主の降嫁を許可し、契丹に対しては精強な軍勢を差し向けて反撃を試みた。ビルゲは以前から公主の降嫁を切望してきたが、玄宗は突厥の強大化を危惧してこれを拒絶していた（注四八）。玄宗は、長年の希望を叶える事でビルゲを手なづけ、契丹から手を引かせようと考えたのであろう。ビルゲは喜び、開元二二年（七三四）四月、唐に使節を派遣し、結婚を許された事を玄宗に謝している。都山の戦いがあつた開元二二年閏三月以降には公主の降嫁が許可されたと考えられる（注四九）。

翻って契丹情勢であるが、玄宗が投入した名将張守珪が、開元二二年四月、契丹軍を撃破した（注五〇）。この戦いには突厥軍は参戦していない（注五一）ので、契丹軍を孤立させるという玄宗の外交戦略は成功を収めたと言えよう。しかし、ビルゲ自身が大臣の梅録啜によって毒殺された（注五二）ため、公主の降嫁は実現しなかった。ビルゲ可汗碑文（南面一〇行目）によれば、ビルゲは戊の年（七三四年）の一〇月二六日に死去した（注五三）。

一方、張守珪率いる唐軍に敗北した可突于は、偽って降伏すると、西北に移動し、突厥軍を呼び寄せようと企てた。これを察知した張守珪の部下王悔は、可突于とともに契丹の兵馬の権を有していた李過折に命じて、屈烈と可突于を誅殺させた。開元二二年一二月、屈烈と可突于の首級は洛陽に送られて梟された。この後、可突于を討ち果たした李過折は、玄宗から褒賞として北平郡王・檢校松漠都督に冊立されたが、李過折もまた可突于の余党泥禮によって殺害される。しかし、玄宗は泥禮を咎めはしたが処罰はせず、松漠都督に任命して契丹の支配を委任した（注五四）。泥禮も唐に帰服し、後には攻め寄せる突厥軍を唐軍と連合して撃破する。玄宗は泥禮を懐柔して契丹を掌握し、あわせて突厥への防御を固めようとしたのであろう（注五五）。泥禮も、かつて李失活が突厥を見限ったように、ビルゲ亡き後の突厥に見切りをつけて唐に帰順したと思われる。

(三) ビルゲ可汗の暗殺者

本節では、ビルゲの暗殺に関する筆者の推察を述べたい。ビルゲを毒殺した梅録啜は、開元一五年に吐蕃の密書を持って唐に派遣された人物であった。開元一五年、吐蕃の書状を携えて入朝した梅録啜を、玄宗は自ら引見し、紫宸殿において宴でもてなした。梅録啜は、前年の開元一四年一月にも来朝し、玄宗から將軍位と紫袍・金細帯を賜わっている(注五六)。唐との和睦はビルゲの外交政策であったろうが、二年続けて和平大使として玄宗に謁見し、互市の許可を得るといふ大役を果たしたことから推して、梅録啜は親唐派であり、和平派であったと考えられる。和平推進者の梅録啜は、唐との交戦を辞さないビルゲを許せなかったであろう。反発心からビルゲを弑殺したと思われる。

あるいは、唐から梅録啜に対して、可汗を暗殺せよとの教唆があったのかも知れない。唐はこれまでも、吐蕃の宰相ロンチンリン(論欽陵)、吐蕃の將軍タグラコンロエ(悉諾邏恭祿)の謀殺に成功している(注五七)ので、唐にとって謀殺は有効な外交オプションであったと推測される。可突于も、唐に唆された李過折によって謀殺されているので、ビルゲも唐側の謀略によって殺された可能性も考えられる。

(四) ビルゲ可汗の契丹干渉の理由

玄宗と和睦したビルゲが、可突于を支援して唐と交戦した理由について本節で考えたいと思うが、先に筆者の結論を述べると、ビルゲの目的は、契丹・奚を唐から切り離し、いずれは第一可汗国時代や先代の默啜時代のように突厥の属国となす事であったと推察する。

默啜の時代には突厥の従属下にあった契丹・奚が、默啜の死の前後に唐に寝返ったため、即位後のビルゲは一度も契丹と奚を支配できなかった。しかし、開元六年、開元九年、開元一〇年に契丹・奚への侵攻を企てている事から、ビルゲが契丹・奚の制圧を試みていた事が推し測れる。また、開元一三年、唐の使者に対してビルゲが発した「奚・契丹は

もと突厥の奴なり（『旧唐書』『新唐書』突厥伝）」という言葉からも契丹・奚を属国視していた事が窺える。もともと覇気のあるビルゲは即位直後から中国への入寇を志していたが、国力が充実するまで自重せよと謀主のトンユククに諫められている。しかし開元一五年、唐と和睦した事でビルゲの政権は安定し、毎年行なわれる唐との絹馬貿易によって突厥は経済的にも潤い、覇気に相応しいだけの経済力と軍事力を獲得したと思われる。

また当時の国際情勢を見ると、唐は開元一六年から一七年にかけて、河西・隴右において吐蕃に対して連続攻撃を繰り返していた（注五八）。おそらく、唐は開元一五年に突厥と和睦したことで北辺の防衛を憂慮する必要がなくなり、翌年から対吐蕃戦に専念したと考えられる。そのため北方・東方に対する唐の警戒心は薄れ、それを好機と捉えたビルゲは可突于と連繫し、北東アジアへの勢力拡張を企てたと思われる。

（五）可突于が唐から許された理由

二度も主君を弑殺し、二度も唐に刃向かった可突于を、なぜ唐は二度とも許したのであるか。

西北に突厥、北に渤海をひかえた契丹は、唐にとっては北東アジアを制しておくための戦略的要地であった。契丹を掌握しておくために、唐は契丹王と奚王を承認し、代々公主を降嫁させて懐柔した。可突于は確かに叛復常なき危険人物ではあるが、契丹人からの人望も篤く、政治・軍事・外交に能力を発揮するので、唐はこの男に利用価値があると判断し、重用し続けたのではないだろうか。

いったい、唐は太宗の時に東突厥（第一可汗国）・高昌国、高宗の時に西突厥・百濟・高句麗を滅ぼしたが、旧主はすべて助命して唐で余生を送らせている。高宗は、六七一年以降、唐に抗戦していた新羅の文武王が謝罪した時にはこれを許している。周辺諸族に対して寛大さを示すのが太宗以来の唐の外交政策であったので、玄宗も可突于を許したと思われる。また、玄宗は開元一〇年、并州への行幸に同伴するほど可突于を気に入っていた。後の安祿山のように、皇

帝のお気に入りだったから許された、ということもあり得るだろう。

第四章 その後の突厥と契丹（開元二三年の登利可汗の契丹遠征）

本章では、ビルゲ可汗と可突于亡き後の突厥・契丹・唐のかかわりを取り上げる。

『旧唐書』『新唐書』突厥伝によってビルゲ死後の唐・突厥の関係を見ると、玄宗はビルゲの死を悼んで碑文と廟の建設に協力し、ビルゲの息子登利可汗（注五九）と父子関係を結んで突厥の幼主を後押ししているので、唐と突厥は支障なく友好的な共存関係を構築できたかのような印象を受ける。しかし、唐・突厥間の和平はスムーズに確立されたわけではなく、開元二三年、唐と突厥は契丹・奚の帰属をめぐって、今一度、最後の激突を行なっている。『資治通鑑』卷二一四・開元二三年条には、

この年、契丹王李過折、その臣涅禮（＝泥禮）の殺すところとなる。（中略）突厥、ついで兵を率いて東して奚・契丹を侵すも、涅禮、奚王李帰国とともに突厥軍を撃破す。

と見える。『資治通鑑』では、攻め寄せた突厥軍を契丹と奚の軍勢のみが撃退したと記されているが、『曲江集』所収の玄宗の勅書によれば、開元二三年七月二五日、能訖離山で行なわれた戦い（『曲江集』卷一四「賀東北累捷状」等）と、同年八月～九月に行なわれた戦い（『曲江集』卷一四「賀東北累捷状」等）において、唐軍と連合した契丹・奚が突厥軍を撃破したことがわかる（注六〇）ので、本章では『曲江集』を史料として、登利可汗の契丹遠征の経緯等を見たいと思う。

（一）登利可汗の契丹遠征

契丹遠征は、開戦前から突厥にとっては分の悪い戦いであった。亡きビルゲ可汗を弔問するために突厥を訪問していた李侗や降人の報告により、突厥軍の出撃は早い時期から唐側に察知されていた（注六一）。また、奚にいた内応者（倚官禱雲）が、奚王・李帰国の暗殺に失敗（注六二）し、同盟者であった渤海も突厥より離反して唐に帰順した（注六三）ため、突厥は謀略にも外交戦略にも失敗した。

対する唐は、あらかじめ突厥の動向を知り得たために応戦準備を十分に整える事ができた。玄宗は蕃漢両将（契丹の泥禮、奚の李帰国、幽州節度使の張守珪、平盧使の烏知義）に対して勅書を下し、互いに連繫するよう指示を下した（注六四）ので、契丹軍・奚軍・唐軍は適材適所で突厥軍に応戦した。突厥騎兵の馳突に対しては、戦闘開始時、先鋒として契丹軍・奚軍があたり、その間、唐軍は堅陣を保持して英気と士気を温存した。そして戦闘中盤、突厥軍が契丹軍・奚軍相手の激戦で疲弊し切ったところに新手の唐軍が攻めかかり、とどめをさした。玄宗の指示に従って、契丹軍と奚軍は先陣を切って突厥軍と交戦し、敗走する突厥軍に対しても追撃戦をしかけた。泥禮も李帰国も、唐に対する忠誠の証を示すため、突厥相手の戦闘で奮戦につとめたと考えられる。

敗北した突厥軍は、俘虜数十万を数え、宰相クラスの要人も戦死するなど甚大な損害を出して退却した（注六五）が、玄宗は突厥軍を深追いせず、登利可汗との和平を果たしている。激突した唐と突厥が、すんなりと和睦できた背景に関しても『曲江集』が手掛かりを与えてくれている。『曲江集』巻二「勅突厥可汗書（第二首）」には、

突騎施は（中略）近日以来、あえて徳に背く。兒（＝登利可汗）の意もまた、これを破らんと欲するを知る。（中略）兒がもし兵を総べて西行するならば、朕も即ち出師してあい応ぜん（注六六）。

と見え、玄宗が登利に向かって対突騎施戦への共闘を呼びかけていることがわかる。

突騎施の蘇祿は、開元二三年一〇月、北庭と安西都護府を襲撃した（注六七）ので、玄宗は突騎施を危険視している

のであろうが、突騎施の動向もさる事ながら、玄宗がより強く意識していたのは吐蕃の動向であったと思われる。吐蕃は過去に少なくとも二度（開元五年と開元一五年（注六八））、突騎施と連合して安西都護府を襲撃しており、この前年（開元二二年）には吐蕃が王女を蘇祿に嫁がせているので、この当時の吐蕃と突騎施は強い同盟関係にあった（注六九）。それ故、玄宗は吐蕃・突騎施連合を牽制するためにも突厥とは連繫する必要がある、北東方面における突厥の背信行為に対しては目をつぶる事にしたと推察される。一方、突厥の登利可汗も、契丹遠征の失敗が仇となって国力と威信を損ねたため、以後は唐に逆らわず、むしろ唐との絹馬交易を活発化して国力の回復につとめたと考えられる（注七〇）。

（二） 突厥による契丹征伐の理由

登利可汗は、なぜ父の暗殺直後、無理を押しつけて契丹に侵攻したのであろうか。『曲江集』卷九「勅渤海王大武芸書（第二首）」によれば、唐側は、突厥は契丹・奚への復讐のために遠征に及んだと分析している。それもあるが、筆者は、契丹征伐には諸族への見せしめの意味も含まれていたと考えている。

二代目可汗默啜の老衰より横死にかけて、契丹・奚以外にもカルルク・キルギス等の諸族が唐に帰順した。第一可汗国滅亡前にも、唐は契丹や鉄勒諸部を突厥から切り離し、突厥を孤立させてから討滅戦に着手した。登利可汗はおそらく、契丹・奚の離反を見逃せば、支配下の諸族も連鎖的に離反するのではないかと危惧し、無理を承知で契丹・奚への征伐を敢行したのではなからうか。

おわりに

契丹は突厥第二可汗国の興亡に大きな関わりを持っていた。再興間もない突厥は、契丹の反乱（六九六～六九七年）

を征伐する過程で勢力を拡大し、唐を圧迫するほどに強大化した。つまり、一面では、契丹は突厥に服属した事で第二可汗国の隆盛に大きく寄与したと言える。その一方で、契丹は第二可汗国の衰退にも大きな影響を及ぼしている。突厥は、唐と連繫した契丹軍に二度も大敗した事で、かえって国運を傾ける結果になったからである。

この後、突厥第二可汗国が滅亡（七四四年）すると、契丹は、突厥に代わってモンゴリアの覇者となったウイグルに服従した。しかし、ウイグルが崩壊（八四〇年）し、唐も滅亡（九〇七年）して中国本土に五代十国の分裂時代が到来すると、この混乱期を好機と捉えた耶律阿保機は契丹諸族を統一し、九一六年、即位して大契丹国を建国した。その後、九四七年に国号を遼と改め、本格的に中華世界に乗り出し、最初の征服王朝として世界史上での大きな流れを作っていた。

本稿でも見たように、七世紀から八世紀前半にかけての契丹は、唐・突厥の二大強国の狭間にあって苦渋を強いられる事もあったが、別の見方をすれば、中華文明と遊牧勢力の双方に流動的に帰属する事で、両者の文化・外交・統治体制に関する多くの知識と経験を集約的に享受できたとも言える。それらの長期間にわたる蓄積が、征服王朝の基盤を形成していったのではないだろうか。

註

(一) 『旧唐書』卷一九九・契丹伝、『新唐書』卷二一九・契丹伝。

(二) 契丹・奚の郡王号に関しては、金子修一「唐代の異民族における郡王号―契丹・奚を中心に―」（『隋唐の国際秩序と東アジア』名著刊行会、二〇〇一年）、契丹・奚への公主の降嫁については、長沢恵「中国古代の和蕃公主について」（『海南史学』二一、一九八三年、三二―三六頁）、日野開三郎「唐代の和蕃公主」（『東洋史学論集・第九卷

〈北東アジア国際交流史の研究・上〉三一書房、一九八四年）を参照。

(三) 松井等「契丹勃興史」(『滿鮮地理歴史研究報告』第一、一九一五年)。田村実造「唐代に於ける契丹族の研究」(『滿蒙史論叢』第一、一九三八年)、「遼朝建国前のキタイ族」(『中国征服王朝の研究』上巻、東洋史研究会、一九六四年)。愛宕松男「契丹古代史の研究」(東洋史研究会、一九五九年)。日野開三郎「突厥默啜可汗の興亡と小高句麗国」(『突厥毗伽可汗と唐・玄宗との対立と小高句麗国』(『東洋史学論集・第八巻』(小高句麗国の研究)』三一書房、一九八四年)。古畑徹「唐渤海紛争の展開と国際情勢」(『集刊東洋学』五五、一九八六年)、「張九齡作『勅渤海王大武芸書』と唐渤海紛争の終結」(『東北大学東洋史論集』三、一九八八年。以下、「唐渤海紛争の終結」と略す)。

(四) 契丹人の名前の表記は史料によって異なる。例えば、可突干は、『旧唐書』巻一九九・契丹伝、『新唐書』巻二一九・契丹伝、『冊府元龜』『唐会要』で可突干、『旧唐書』巻八・玄宗紀、『資治通鑑』で可突干、泥禮は『旧唐書』『新唐書』契丹伝で泥禮、『資治通鑑』『曲江集』で涅禮と表記されている。これについては先行研究でも見解が異なる。松井等「契丹勃興史」二七三〜二七四頁の注二八、田村実造「遼朝建国前のキタイ族」一〇七頁の注二二、愛宕松男「契丹古代史の研究」二七一頁の注二を参照。

(五) 相関図および本文の年月は、当時の史料に従って陰暦で表した。

(六) 『資治通鑑』巻二〇二・調露元年一〇月壬子条。

(七) 李尽忠は、李窟哥(貞観二二年に唐に帰順し、太宗より李姓を賜わった契丹の首領)の孫で、孫万栄の妹を娶っていた。孫万栄は、孫敖曹(武徳四年に唐に内附した契丹別部の首領)の曾孫。

(八) 『旧唐書』巻一九六・吐蕃伝、『新唐書』巻二一六・吐蕃伝、『資治通鑑』巻二〇五・万歳通天元年三月壬寅条。菅沼愛語・菅沼秀夫「七世紀後半の「唐・吐蕃戦争」と東部ユーラシア諸国の自立への動き―新羅の朝鮮半島統一・突

厥の復興・契丹の反乱・渤海の建国との関連性―」『史窓』六六、二〇〇九年）一三―一四頁。

(九) 『資治通鑑』卷二〇五・天冊萬歲元年一〇月条。

(一〇) 『旧唐書』『新唐書』契丹伝、『資治通鑑』卷二〇五・万歲通天元年五月壬子条く神功元年六月条。

(一一) 『旧唐書』卷一九四・突厥伝、『新唐書』卷二一五・突厥伝、『旧唐書』『新唐書』契丹伝など。

(一二) 松井等「契丹勃興史」一六二頁、日野開三郎「突厥默啜可汗の興亡と小高句麗国」一三三頁、菅沼愛語・菅

沼秀夫「七世紀後半の「唐・吐蕃戦争」と東部ユーラシア諸国の自立への動き」一四―一五頁。

(一三) 『旧唐書』卷一九九・奚伝、『新唐書』卷二一九・奚伝、『資治通鑑』卷二一〇・先天元年六月庚申条。

(一四) 『旧唐書』卷一九四・突厥伝、『新唐書』卷二一五・突厥伝、『資治通鑑』卷二一一・開元二年九月壬子条、

開元三年正月く二月条、開元四年六月癸酉条。

(一五) 李失活は、李尽忠の従父弟。

(一六) 契丹と奚が唐に内附した時期は史料によって異なり、『旧唐書』契丹伝は開元三年、『新唐書』契丹伝は開元

二年、『資治通鑑』卷二一一は開元四年とする。愛宕松男氏『契丹古代史の研究』二二三頁の注六)は、開元四年の默

啜の敗死とその後の突厥の混乱が、契丹・奚の唐への内附の契機になったと考察している。

(一七) 李失活は松漠郡王・松漠都督に封じられて永樂公主が降嫁し、李大酺は饒樂郡王・饒樂都督に封じられて固安公主が降嫁した。

(一八) 『唐会要』卷七三・営州都督府、康樂『唐代前期的边防』(国立台湾大学出版委員会、一九七九年)一一八頁の「本朝沿辺九節度使職權轄区及所領軍鎮略表」。

(一九) 『冊府元龜』卷九八六・外臣部・征討五・開元六年二月条、『全唐文』卷二一「征突厥制」。

- (二〇) 『旧唐書』『新唐書』契丹伝、『資治通鑑』卷二二二・開元六年五月条。
- (二一) 『旧唐書』卷九三・王峻伝、『新唐書』卷一一一・王峻伝、内藤みどり「突厥による北庭のバスマイル攻撃事件」(『東洋学報』八一・四、二〇〇〇年) 五九四〜五九五頁、六〇三頁。
- (二二) 『旧唐書』卷一九四・突厥伝、『新唐書』卷二一五・突厥伝、内藤みどり「突厥による北庭のバスマイル攻撃事件」五九三〜五九四頁。
- (二三) 田村実造氏は、可突于の謀反によって契丹と唐の関係が悪化したために、突厥挾撃計画は失敗したのであると考察している。「唐代に於ける契丹族の研究」三二頁、「遼朝建国前のキタイ族」八四〜八五頁。
- (二四) 岩佐精一郎「突厥毗伽可汗碑文の紀年」(『岩佐精一郎遺稿』東京、一九三六年) 二〇七頁。
- (二五) 『旧唐書』『新唐書』奚伝によれば、契丹の反乱(六九六〜六九七年)以後、契丹と奚は両蕃と称されるようになった。
- (二六) 宋慶礼は、營州都督府復置を進言し、營州都督となって營州の再興に力を尽くした。『旧唐書』卷一八五・下・宋慶礼伝、『新唐書』卷一三〇・宋慶礼伝。
- (二七) 『旧唐書』『新唐書』契丹伝、『資治通鑑』卷二二二・開元八年条。
- (二八) 『旧唐書』突厥伝、『冊府元龜』卷九七九・外臣部・和親、護雅夫「突厥と隋唐両王朝」(『古代トルコ民族史研究Ⅰ』山川出版社、一九六七年) 二〇〇頁、拙稿「唐玄宗「御製御書」闕特勤碑文考—唐・突厥・吐蕃をめぐる外交関係の推移—」(『史窓』五八、二〇〇一年) 三三二頁。
- (二九) 小野川秀美「突厥碑文訳註」(『満蒙史論叢』四、一九四三年) 六三頁、一三七頁の注一五九、岩佐精一郎「突厥毗伽可汗碑文の紀年」二〇八頁。

(三〇) 同様の記述は『唐会要』卷六・和蕃公主・固安公主伝にも見える。

(三一) 『曲江集』卷九「勅奚都督李帰国書(第一首)」に、「近得守珪表称、奚倚官糲雲輒構異謀、攜間部落、兼蔵突厥、仍欲凶卿……聞已誅剪」とある。岑仲勉『突厥集史・上冊(岑仲勉著作集)』(中華書局、二〇〇四年)四四五頁、古畑徹「唐渤紛争の終結」四七頁。

(三二) 『資治通鑑』卷二二二・開元九年条、卷二二三・開元一四年四月辛丑条。康楽『唐代前期的边防』一一八頁。

(三三) 『資治通鑑』卷二二三・開元一五年九月丙戌条、『冊府元龜』卷九九九・外臣部・互市・開元一五年条によれば、ビルゲは大臣の梅録啜を唐に派遣し、吐蕃の書状を献上した。拙稿「唐玄宗「御製御書」闕特勤碑文考」三三六頁。

(三四) 『旧唐書』『新唐書』突厥伝、拙稿「唐玄宗「御製御書」闕特勤碑文考」三三二頁。

(三五) 田村実造「遼朝建国前のキタイ族」八五〜八六頁。

(三六) 『旧唐書』契丹伝。

(三七) 李吐于は、李鬱于の弟。開元一二年に李鬱于が病死すると、兄の官爵を継承し、兄の妻燕郡公主を娶った。可突于との不和が原因で唐に亡命した李吐于が、帰国しようとしなかったため、玄宗は吐于を遼陽郡王に封じ、宿衛となした。

(三八) 李邵固は、李尽忠の弟。開元一四年、東華公主が降嫁した。

(三九) 『旧唐書』『新唐書』契丹伝、『資治通鑑』卷二二三・開元一八年条など。尚、奚王の李魯蘇は、奚の民を統御する事ができずに楡関に逃走し、東光公主(李魯蘇の妻)と東華公主(李邵固の未亡人)も営州の平盧軍に避難した。

(四〇) 岑仲勉『突厥集史・上冊』四三四〜四三八頁、古畑徹「唐渤紛争の展開と国際情勢」二〇〜二二頁。

(四一) 『旧唐書』卷七六・信安王禕伝、『新唐書』卷八〇・信安王禕伝。

(四二) 『旧唐書』卷八・玄宗紀、『新唐書』卷五・玄宗紀、『資治通鑑』卷二一三・開元二〇年三月条。尚、会戦場を、『旧唐書』玄宗紀は幽州の北山であったとするが、『新唐書』玄宗紀は薊州であったとする。

(四三) 『文苑英華』卷六四七「破契丹露布」に「突厥分兵、助為聲勢、官軍既会、万弩斉発、逆順不敵、賢王失陣」とある(『全唐文』では聲勢が聲援になっている)。賢王は匈奴の左賢王・右賢王であるが、ここは援軍として参戦した突厥の將軍を指し、突厥軍が唐軍と対戦して敗北した事がわかる。

(四四) 古畑徹「唐渤海紛争の展開と国際情勢」。

(四五) 『旧唐書』(玄宗紀、卷一〇三・郭英傑伝、契丹伝)、『新唐書』(玄宗紀、卷一三三・郭英傑伝、卷一三六・烏承玘伝、契丹伝)、『資治通鑑』卷二一三・開元二一年閏三月癸酉条、『文苑英華』卷六四七「破契丹露布」、ビルゲ可汗碑文南面八行目く九行目(小野川秀美「突厥碑文訳註」六四頁、一三七頁の注一六〇)。岩佐精一郎「突厥毗伽可汗碑文の紀年」一八〇頁、古畑徹「唐渤海紛争の展開と国際情勢」二〇〇～二二頁。

(四六) 『文苑英華』卷六四七「破契丹露布」に「我行軍七千……斬单于之愛子」とある。单于是、ここでは可汗を指し、唐軍がビルゲの息子を斬殺した事がわかる。

(四七) 渤海への対策に関しては、古畑徹「唐渤海紛争の展開と国際情勢」を参照。

(四八) 護雅夫「突厥と隋唐両王朝」二〇六頁。

(四九) 『冊府元龜』卷九七九・和親二・開元三二年四月条。岑仲勉氏(『突厥集史・上冊』四三四頁)は、三二年を二二年の誤りであるとしている。護雅夫「突厥と隋唐両王朝」二〇二頁、古畑徹「唐渤海紛争の展開と国際情勢」二六頁、三三頁の注五〇。

(五〇) 岑仲勉『突厥集史・上冊』四三八頁、古畑徹「唐渤紛争の展開と国際情勢」二〇頁の表Ⅰ唐・契丹紛争年表、三二二頁の注二三。

(五一) 『文苑英華』卷六四七「破契丹露布」に「突厥銳而逃、渤海懾懼、勢未敢出」とある。

(五二) 『旧唐書』『新唐書』突厥伝、『資治通鑑』卷二一四・開元二二年条。

(五三) 小野川秀美「突厥碑文訳註」六四頁〜六五頁、一三八頁の注一六一。

(五四) この前後の事情に関しては『旧唐書』『新唐書』契丹伝、『資治通鑑』卷二一四・開元二二年六月壬辰条、二月乙巳条、開元二三年条、『曲江集』卷九「勅契丹都督涅禮書（第一首）」。田村実造「唐代に於ける契丹族の研究」三七頁、「遼朝建国前のキタイ族」八六〜八七頁。

(五五) 田村実造「唐代に於ける契丹族の研究」三七頁、「遼朝建国前のキタイ族」八七頁。

(五六) 『冊府元龜』卷九七五・外臣部・褒異二・開元一四年一月巳亥条。注三三三も参照。

(五七) 論欽陵の謀殺に関しては『資治通鑑』卷二〇五・万歳通天元年九月条、佐藤長『古代チベット史研究』上巻（東洋史研究会、一九五八年）三六二〜三六六頁、悉諾邏恭祿の謀殺に関しては『旧唐書』卷九九・蕭崇伝、『冊府元龜』卷四一一・将帥部・間諜を参照。

(五八) 唐軍は、開元一六年正月、吐蕃軍を曲子城で撃破、七月には青海西の渴波谷で吐蕃軍を大破し、八月には祁連城で吐蕃軍を撃破した。開元一七年三月には、瓜州都督の張守珪が吐蕃の大同軍を撃破し、朔方節度使の信安王禕は石堡城を吐蕃より奪還した。『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』卷二二三・開元一六年〜開元一七年条、『冊府元龜』卷三五八・将帥部・立功一一、卷三六六・将帥部・機略六、卷三六九・将帥部・攻取二など。尚、信安王禕は開元二〇年、張守珪は開元二二年に各々契丹軍を撃破している。対吐蕃戦での戦績を評価されて、両将は対契丹戦に投入さ

れたものと思われる。

(五九) ビルゲの死後、息子の伊然と登利が相次いで可汗位を継承したが、各々の治世期間については史料によって異なる。本稿は護雅夫氏の考証(『突厥と隋唐両王朝』二〇八頁、二二二頁の注六一)に従い、開元二三年の時点での可汗を登利とした。尚、登利は登里とも記される。

(六〇) 岑仲勉氏は『突厥集史・上冊』において『曲江集』に残る玄宗の勅書を整理して発布時期等を考証し、古畑徹氏は「唐渤海紛争の終結」で、勅書を利用して唐・渤海紛争の終結を論考している。二度の戦いに関しては、古畑徹「唐渤海紛争の終結」四五頁の表四を参照。

(六一) 『曲江集』卷一三「論東北軍未可輕動狀」に「李佺使廻、虜亦具云東下」、卷八「勅幽州節度使張守珪書(第三首)」に「近有降人云、虜騎東下、其數稍衆」とあり、突厥軍が、東すなわち契丹に向けて出撃したことがわかる。

岑仲勉『突厥集史・上冊』四四二〜四四三頁。

(六二) 注三一を参照。

(六三) 『曲江集』卷九「勅渤海王大武芸書(第二首)」に「近得卿表、云突厥遣使求合擬打兩蕃……卿但不從、何妨有使擬行執縛」とある。渤海王の大武芸は、突厥が下した契丹への出撃命令を拒絶したばかりか、突厥の使者を捕縛して唐に献上し、玄宗に忠誠心を示して唐との和睦をはかっている。石井正敏「張九齡作「勅渤海王大武芸書」について」(『朝鮮学報』一一二、一九八四年)七四頁、『東アジア世界と古代の日本』(山川出版社、二〇〇三年)八二〜八三頁。

(六四) 『曲江集』卷八「勅幽州節度使張守珪書(第三首)」に「虜騎馳突、難與争鋒、會是乘其氣衰、然後邀擊一戰、取滅或在此舉」、卷九「勅平盧使烏知義書(第一首)」に「契丹及奚等、并力合謀、同破凶醜。卿亦繼進、相與成功。

此之一捷、使其喪氣……已勅守珪與卿計会」、卷九「勅奚都督李焄国書（第二首）」に「朕比聞突厥欲滅卿兩蕃。先勅守珪嚴為防護……卿可與涅禮相為腹背……卿可伺其歸師、乘其喪氣、與諸將計会、遂要追襲、時不可失」、卷九「勅松漠都督涅禮書（第二首）」に「烏知義在彼、宜與臨事籌之……亦與計会」、卷一三「論東北軍未可輕動狀」に「若契丹等偶勝、北虜勢衰、因而乘之、滅其大半」、卷一四「賀破突厥狀」に「使蕃騎先鋒、漢軍堅壁、坐觀成敗、自戰蕃夷」とある。岑仲勉『突厥集史・上冊』四四二～四四八頁。

(六五) 『曲江集』卷一四「賀破突厥狀」に「契丹涅禮等、前後斬獲浮馘数十万、突厥可汗棄甲逃亡」、卷一四「賀依聖料赤山北無賊及突厥要重人死狀」に「陛下又云、必應彼有要重人死、所以即去……又云、契丹有蕃落人走来云、突厥之兵馬平章事第一人死、所以狼狽即去」とある。岑仲勉『突厥集史・上冊』四四四～四四六頁。

(六六) 岑仲勉『突厥集史・上冊』四四八～四四九頁。

(六七) 『旧唐書』玄宗紀、『資治通鑑』卷二二四・開元二三年一〇月戊申条。

(六八) 『旧唐書』玄宗紀、『資治通鑑』卷二二一・開元五年七月条、卷二二三・開元一五年閏九月庚子条。

(六九) 佐藤長『古代チベット史研究』四七〇～四七一頁。

(七〇) 『曲江集』卷一一「勅突厥可汗書（第四首）」に「去歲將馬其數倍多……往者先可汗在日、每年納馬不過三千匹、馬既無多、物亦易辦、此度所納、前後一万四千……此後將馬來納、必不可多、還如先可汗」、卷一一「勅突厥可汗書（第五首）」に「去年所將馬來前後數倍、常歲至於好惡、未必皆以兒知其中老弱病患、及軀格全小、不堪駕馭」とある。これにより、登利可汗が盛んに馬を獻じて絹との交換を渴望している事、突厥がもたらす馬の数が多過ぎる上に粗悪で使い物にならない事、玄宗が困惑し、登利に対してビルゲ時代の約定を守るよう諭している事などが窺える。岑仲勉『突厥集史・上冊』四五〇～四五二頁。